



光に遇う

本願寺派 布教使 西原 祐治

元旦のことです。妻が「珍しい人から年賀状が届いています」と言いました。

その年賀状は八年前にお淨土へ往つた父から、私にあてられた年賀状でした。実は、この年賀状は私が出したものでした。

正月を迎える一週間前のことです。来

年は何を大切にして過ごそうかと考えて

いた時、「そうだ、大切な言葉を、父から年賀状という形にして自分に届けよう」と思ったのです。そして「珍しい人から……」となつたのでした。自分で書いたものではありますが、書かれている言葉が淨土から届けられたような気持

ちになり、とても有り難いご縁となりました。(中略)

おそらく正月に思つたことは、思つただけならば、時の過ぎゆくほどに失念していたのだと思います。しかし、父からの年賀状として届いて見ると、大切な言葉

はいつも私の思いの中にはあります。

さてその父からの年賀状には、ご報謝の一 年を送つてください。父 正念 とあります。ご報謝とはお礼するということです。

しかし、お礼や感謝にもいろいろあります。

もう三十数年も前のことです。あるご家庭に、法事のご縁をいただいて伺つた時のことです。読経を終え、お茶を飲みながら世間話をし

ていました。すると家の方が、「今の若い人は

感謝という言葉も知らない」と言われます。

会話の内容は、個人商店であるそのお宅に、

高校を卒業した一人の若者が就職してきました。

た。話の流れの中で「感謝しなさい」と言つたそうです。するとその青年から「奥さん、

感謝つて何ですか」という言葉が返ってきた

というのです。

私も話題に同調して、感謝ということを知つてゐる側に立ち「そうですね、そうですね」と相づちを打ちました。その相づちを打つ私

の心の隅に、感謝の心は良い心、仏さまに近い心という価値判断がありました。

その日、お寺へ帰つてほんやりとしているところです。その感覚を言葉にすれば、「お前は勝手だなあ」ということです。何が勝手かといえば、自分に都合がよいと何度も感謝するが、自分に不利益があつたり都合が悪いことであれば、感謝どころではない。それがお前は現実ではないか、ということです。私の感謝についての浅い理解を言い当てられたような気持ちになり、恥ずかしく思いました。誠にその通りです。私が抱く感謝の心は仏さまに近い心どころか、私という我欲、自己中心的な心を一步も離れていないのです。それが私に偽りのない姿だったのです。

この我欲によつた感謝ではなく、すでに恵まれていることへの気づきを縁とした感謝が大切です。そして何よりも大事なことは、私の感謝が我欲を一步も離れていないという気づきも、ともすでに恵まれていることへの気づきも、ともに阿弥陀さまの智慧のみ光によつてもたらされるということです。